兒童藝術映畫の目標

現代兒童藝術映畫の推移は、物質的に流れて、純眞なる兒童精神と離反するもの多し、而も映畫の感化影響の兒童精神を支配する事の驚くべきは、何人も首肯する處なれども、未だ其改革に努力せるものあるを聞かず、爲に社會的病患の胚胎する事深きを惧る我等茲に觀るところあり、純眞なる兒童藝術映畫を提供し、不知不識のうちに、兒童教化の爲に努力せん事を期す。

本映畫は文部省に於て推薦後
日本最初の認定映畫となりました。

内務省社會局が社會教化、兒童教化の映畫として推薦せられたのは此の『塙保己一』が最初の映畫であります。

又文部省に於ても、推薦映畫を超越して、認定映畫としたのは、今日まで映畫劇として、その例なく此の『塙保己一』を以つて嚆矢と致します。東京市社會教育課では目下此の映畫を、推薦映畫標準フィルムとして、數多い映畫製作業者の指針に供し、社會的教材として、ひろく一般に公開せんと計畫準備中であります。要するに此の映畫の出現は、日本に於ける兒童映畫の最高標準でありまして、絶對の追從を許さないものであります。

引續き本協會は、坪内逍遙博士、藤澤衛彦氏、野口雨情氏、北原白秋氏、沖野岩三郎氏、濱田廣介氏、本居長世氏等、童心に理解ある斯界の權威の作品を矢繼早に製作發表致します。

社團法人兒童藝術協會
兒童藝術映畫協會

兒童藝術映畫協會

第壹回作品

塙保己一

提供　兒童藝術協會

社團法人

映畫化　松竹キネマ株式會社　京都撮影所

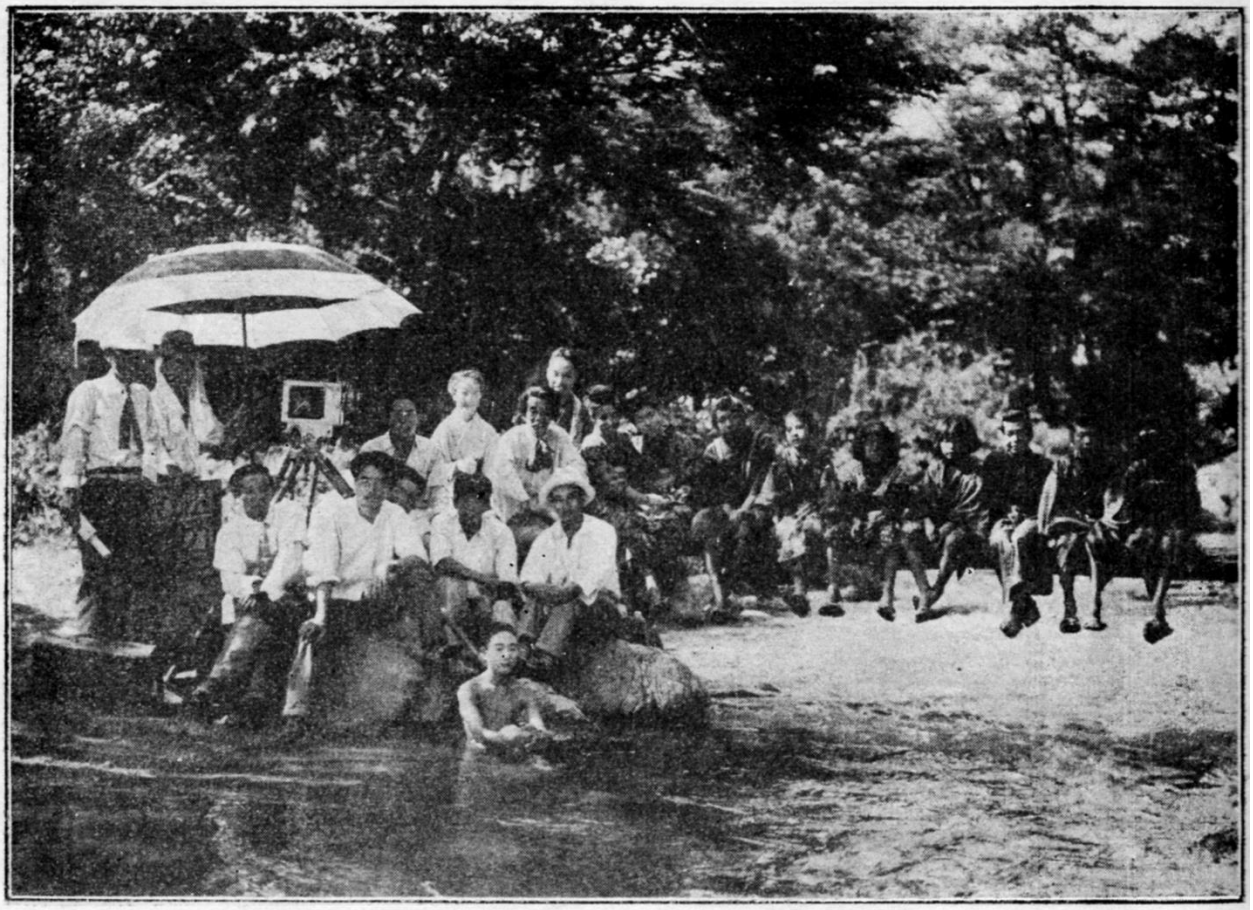
作者　藤澤衛彦

監督　友成用三

技師　友成達雄

配役

辰之助 ― 青木孝夫
辰之助の母 ― 中川芳江
絹商人 ― 大崎時一郎
楠正成 ― 市川傳之助
楠正行 ― 清水玲子
正行の母 ― 二條照子
長吉 ― 都一男
軍談師 ― 百崎志摩夫
根岸肥前守 ― 坪井哲
塙保己一 ― 關操



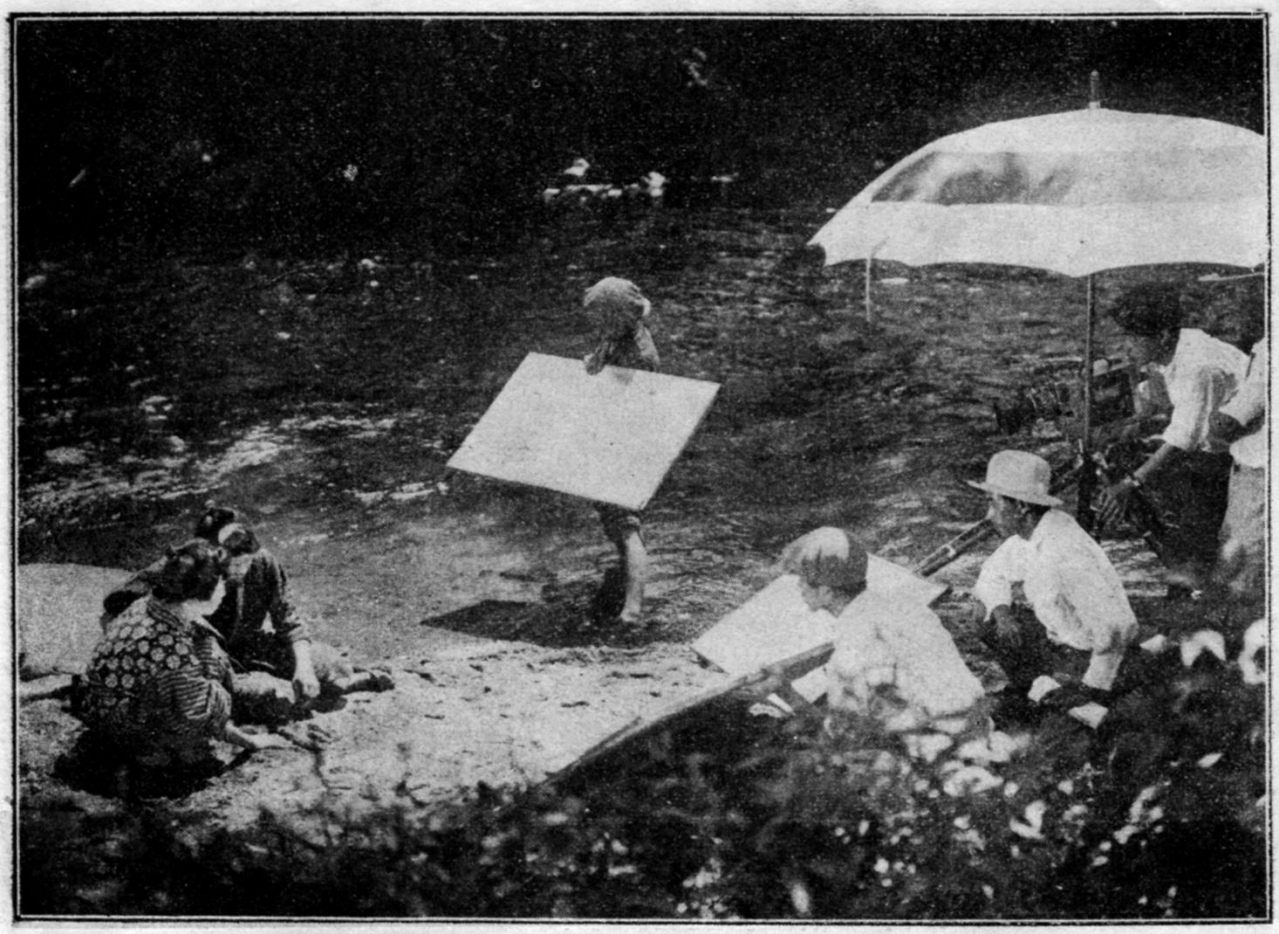
塙保己一

原作　藤澤衛彦

一

手ひき　手々ひき
ひつくりかへつちや
ぶつたふし
ひつくりかへつちや
ぶつたふし
あて、、　チヨン
チヨン　チヨン　チヨン

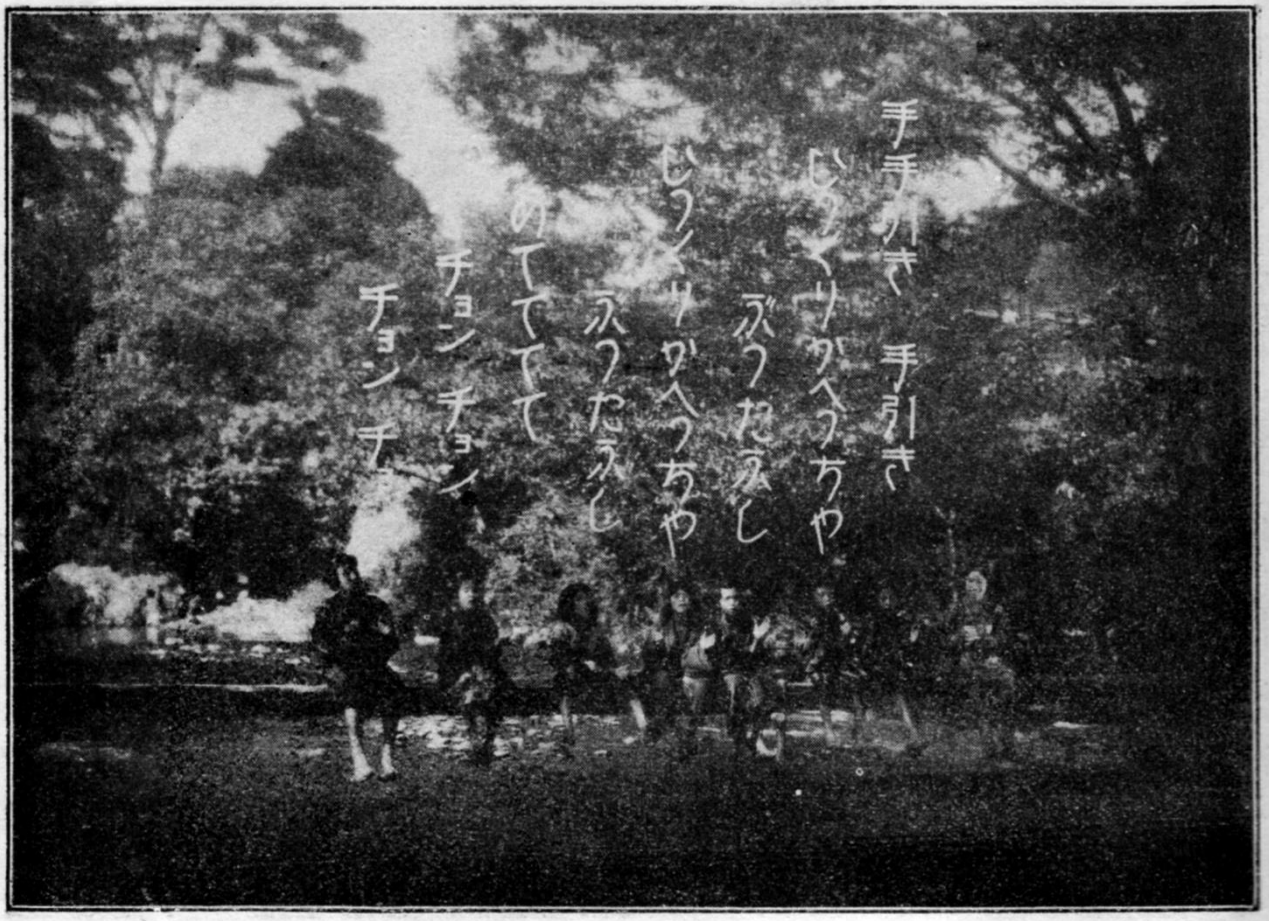
村を流れる小川にかゝつてゐる橋の上で、おほ勢の子供たちが手べうしこりながら、菫切鳥の歌をうたつてゐました、その中でも、面白さうに聲をはりあげて、はやしたてゝゐるのは、長吉といふ餓鬼大將でした「さあ、



もう一度やらうよ」長吉はおんどをとつて、

手々ひき　手ひき
ひつくりかへつちや
ぶつたふし

と、うたひはじめました、小川の川下に、草深い一軒の百姓家がありました、その家のうらでは、水車が、音をたてゝまはつてゐましたが、長吉等の唄は、そこまできこえてくるのでした「あゝ、またあの唄をうたつてゐる」さうつぶやきながら、うらめしさうに、歯をくいしばつたのは、母とたゞ二人、この家に住んでゐる辰之助といふ少年でした、辰之助は目が見にませんでした、ですから村の子供たちのやうに、かけだしたり、飛んだりすることができません、うつかりして、杖をわすれると、木にぶつかつたり、石につまづいた



りして倒れることも、たびたびありました、ですから、唄にことよせて、辰之助をからかふには、よしきりの唄はもつてこいなのでした、辰之助がしほれてゐるのに氣がついて、お母さんが、聲をかけました「辰之助や、どうしたの」お母さんの、やさしい言葉をきくと辰之助はいつそうかなしくなりました「いいえ、何でもありません」「でもお前泣いてゐるのぢやあないの」「はい」辰之助はもうこたへるのが、精いつぱいで、もう胸のおくから、こみあげてくる涙をおさへることができなくなつてしまひました「お母さん、あの唄をきいてください、私が盲目なものですから、みんなで、私をからかふのです、どうせ私は盲目です、人並ではないのです」辰之助はお母さんにごりすがつて、口惜しさうに涙

をこぼすのでした、お母さんもさすがに目に露をやどしましたが、氣をひきたてゝ「つまらないことを氣にしてはいけませんよ、たとへ目が見えなくても、一生懸命になりさへすれば、自分の思ふことが出來ないわけはありません、支那の昔の話ですが……」と辰之助のそばによつて話はじめました、それは深い山奥の出來ごとです、熊渠子といふ人が、山を下つてくると、不意に一匹の虎が現れましたおどろいて、逃げやうとしましたが、虎はいまにも飛かゝらうと身がまえてゐます、もう逃げることもできないので熊渠子は、覺悟をさだめ、全身の力でひきしぼつた矢を、虎にむけてヒユウと射放ちました、矢はねらひあやまたず、美事に虎の首につきさゝりましたがそれにしてはちつとも動かないので、不思

議におもひ、恐るおそる側へ行つてみると、虎に見にたのは岩で、矢はその岩につきさつてゐたのでした。「おもふ念力、岩をも透すといふ諺のとほり一心になれば、出來ないことなぞはありません。くよくよしてゐたり忍耐や勇氣がないと、何事も駄目です」お母さんの言葉には、力がこもつてゐました。辰之助の顔はきうにいきゝこしてきました。

「私は學者になりたいのですが、ぢやあ、一心になれば目が見えなくても偉い學者になれるでしようか」「あゝ。なれるとも。きつとなれますよ」辰之助はお母さんに勵まされて此時ひそかに――よし、私は立派な學者になつて見せるぞッ――と胸のうちでつぶやきました。辰之助は五才の時、千字文を暗記し、七才の時には、もう「漢語大和故事」を

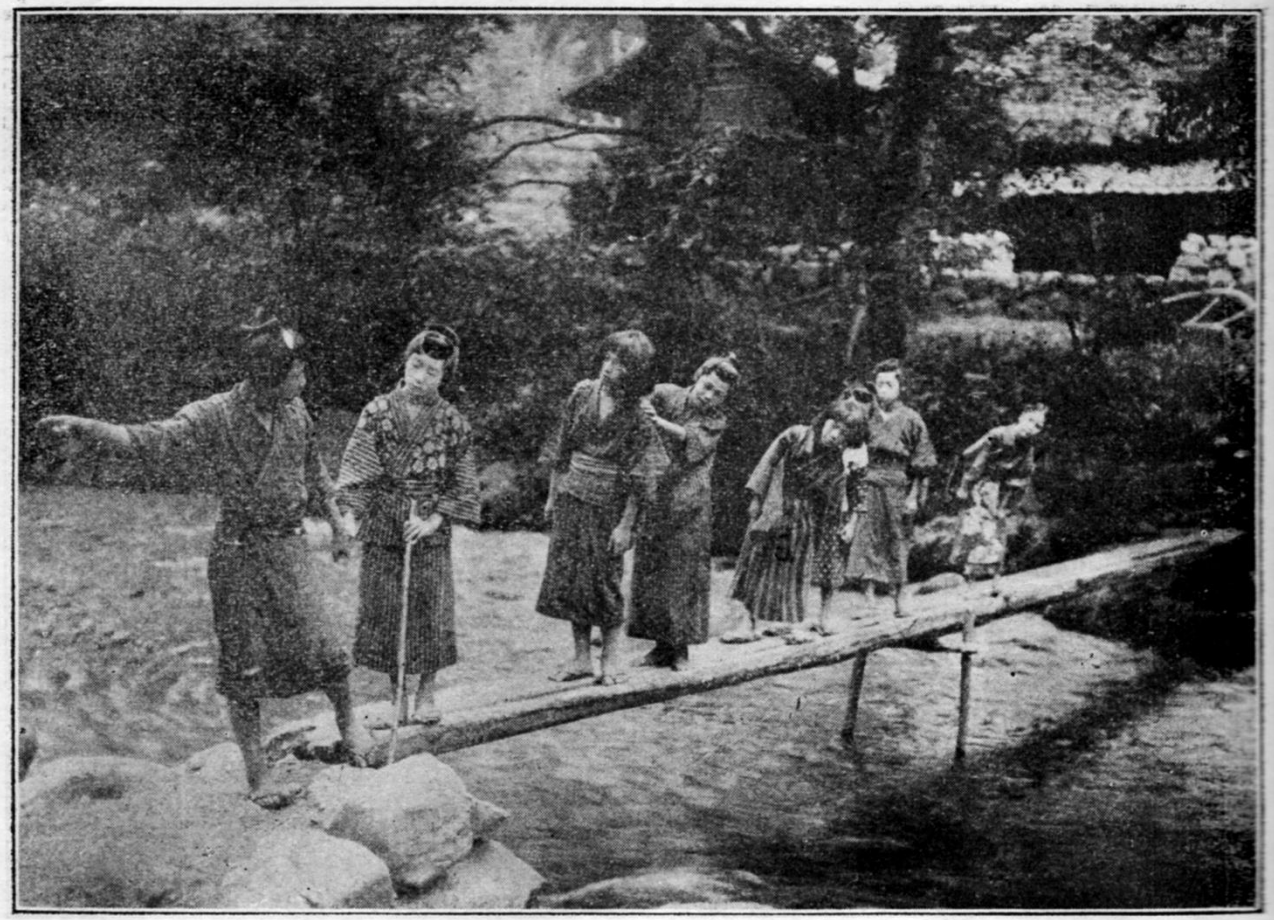
そらで覺にてしまひました。

二

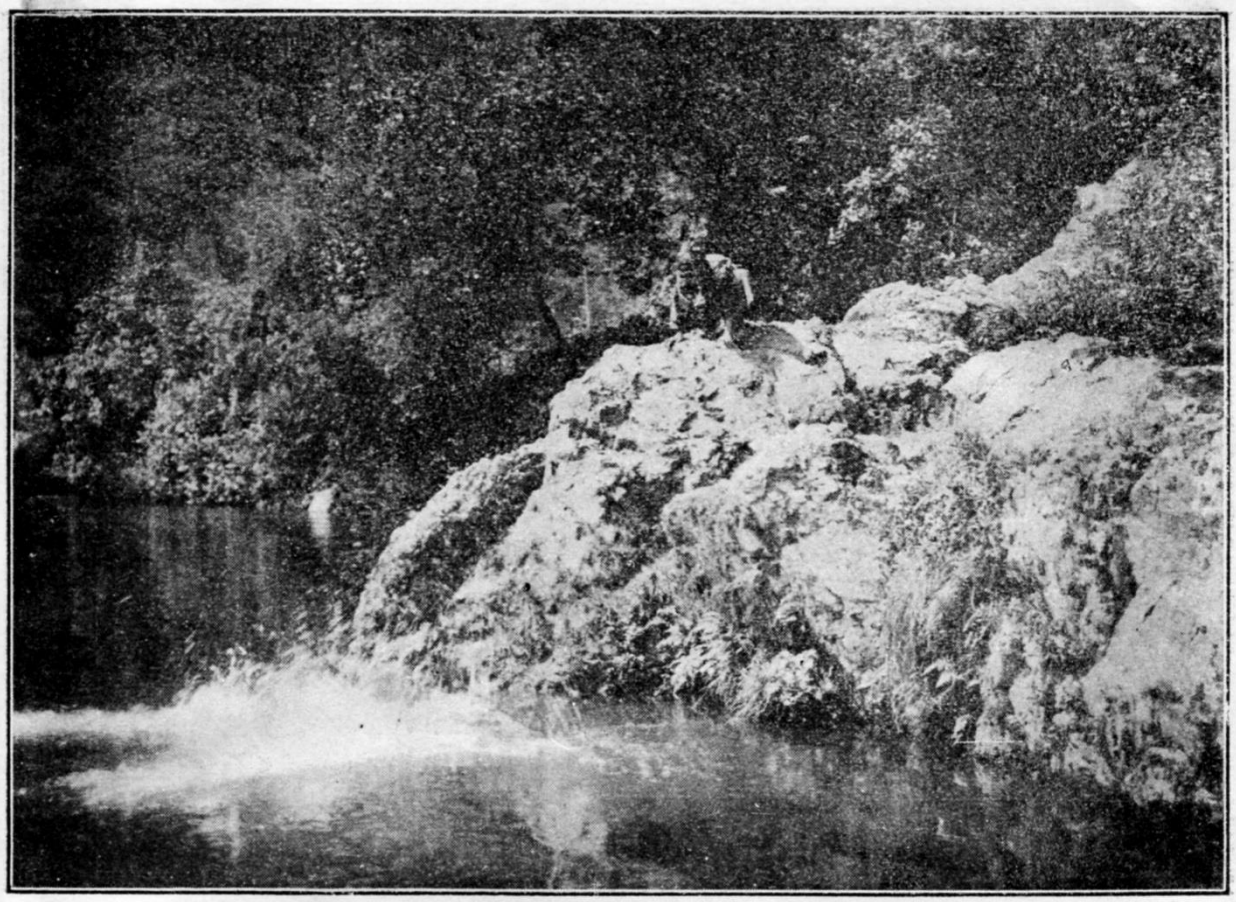
いたづらつ子の長吉は、唄ひはやしてゐるだけでは、ものたりなくなつて、辰之助をたうとう、遊びなかまにひつぱりだしました。

「さあお前こういふ字を知つてゐるか」長吉は、河瀬の砂の上に、「山」といふ字をかきました。辰之助は見えない目を見はるやうにして手さぐりで、その上をなでるのでした。

「山といふ字だ」長吉は二三日前、寺小屋で覺えたばかりの「山」といふ字を自分よりずつと年下でしかも盲目の辰之助が知つてゐたので、いまいましくおもひました。辰之助は笑つて「ぢや長吉さん、今度はお前の番だ」といつて、砂の上に「谷」といふ字をかきま



した。長吉はこまりました。知らないのです「そんな字あるもんか。こんなことをして遊んでもつまらないから、他のことをしやう」長吉はきまりが、わるいのでごまかしてしまひましたが、盲目の癖に何でもよく知つてゐる辰之助が憎くてたまりません。どうかしてヒドイ目にあはして、うつぷんをはらしたいと思つて、「さあ、今度は、隠れん坊だ。ヂヤン、ケン、ポン……あゝ辰之助は石をだしたね。皆は紙だから、お前が鬼だよ、お前は盲目だから、目かくしをしなくてもいゝ」などと、憎まれ口をきいて、手をたゝきながらわざと川ツぷちへ誘ひました。長吉は辰之助を川の中へおとしてやらうと思ひついたのでした。辰之助は、さうとは知らないので手のなる方をたよりにすゝんで行くと、突然、



「あツ」といふ叫び聲といつしよに、人が水におちた音をきゝました。つゞいて、「助けて――」それは、長吉の聲です。長吉は、辰之助を、川へおとしてやらうとして、自分で足をふみすべらしてしまつたのでした。

「皆、來て！早く！早く!!」辰之助はふだんの恨もわすれて、大聲に叫び、自分の帶をほどいて、川に投げこみ、大さはぎでやつと救ひあげました。長吉は、驚きで氣を失つてゐましたが、フト氣がついて目をひらくと、そこに、見えぬ目をしばたゝきながら、自分を介抱してゐるのは辰之助でした。「あツ、氣がついたぞ」と一人の子が嬉しさうにとびあがりました。「おゝいきかへつた」と、他の子も叫びました。「わかりますか」つゞいて辰之助は、安心したやうに云ひました。長吉

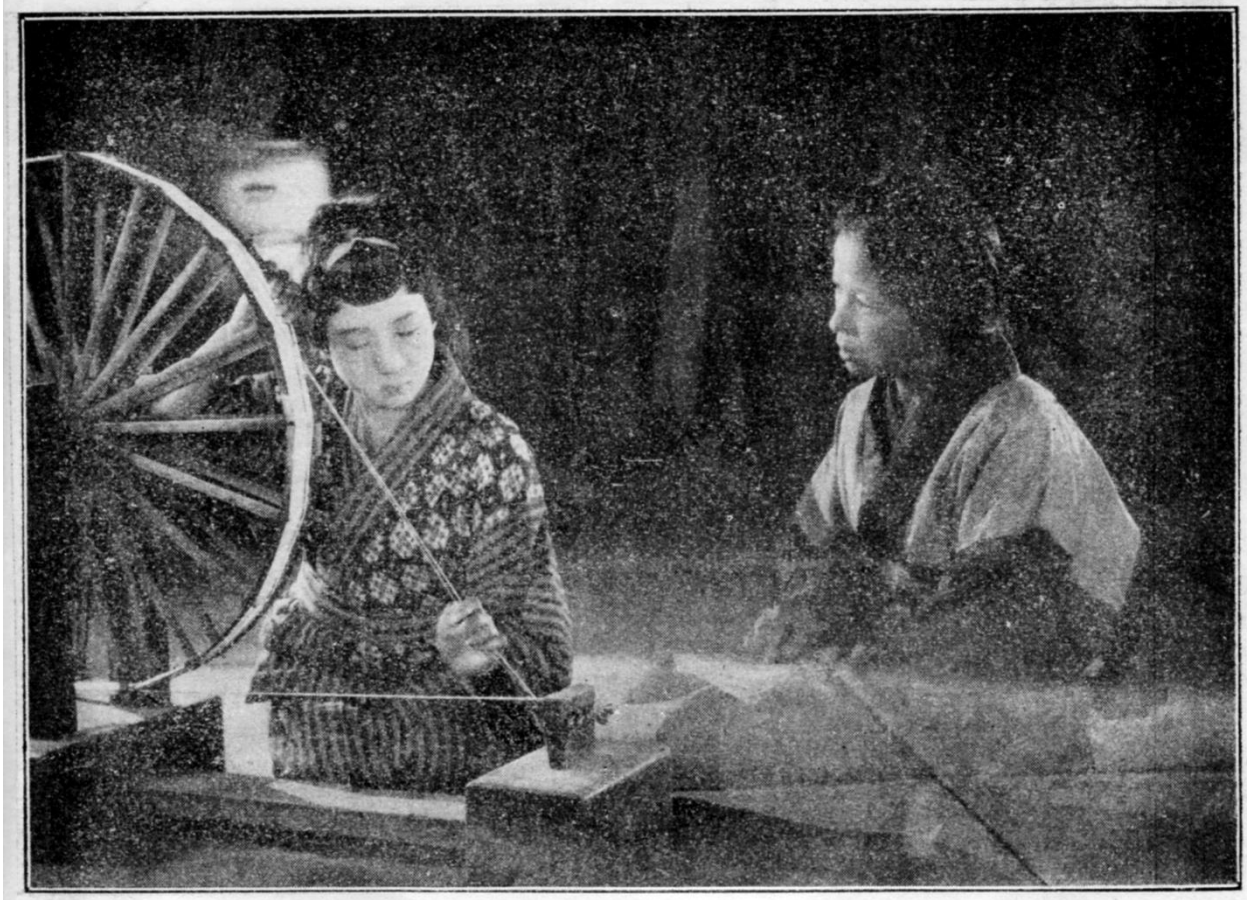
は、自分のしたことが、心の底からはづかしくなりました。惡かつたと、おもはずにはゐられませんでした。「ありがたう、勘忍しておくれよ」長吉は、辰之助の手をとつて、涙ぐみました。「いゝよ。いゝよ。これからはみんな意地わるなんかしないで仲よくしやうよ、ね」辰之助は、いままで、さん〳〵からかはれてゐた恨もわすれて、心からニツコリと頬笑むことが出來たのでした。

三

昨日の長吉は、もう今日の長吉ではありませんでした。長吉は、やさしいおもひやりのあるおとなしい子になりました。みんなも、辰之助の立派な行にうたれて、誰一人として辰之助をしたはない者はなくなりました。仲

よくあそびました。揃つて勉強しました。そのあとでは、お母さんが御褒美に、お結飯を作つてくれました。いゝお母さんでした。ところが、そのいゝお母さんは、フトしたことから、病の床につくやうになりました。雨の降る晩し風の吹く日。幾日かたつて、野邊ではこほろぎが、さびしくなきはじめました。お母さんの枕元に据つてゐると「辰之助や」「はい」「私の教へた本はどの位覺えましたか」「もう、みんな闇記いたしました」「ぢやあ、きかせておくれ」「はい」辰之助はお母さんの枕元へ本をおいて、自分はそらでよみあげはじめました。お母さんは、さうしてゐるうちに、だん〳〵くるしみはじめました病氣が重くなつて來たのです。「お母さん、また痛みはじめたのではないのですか」辰之

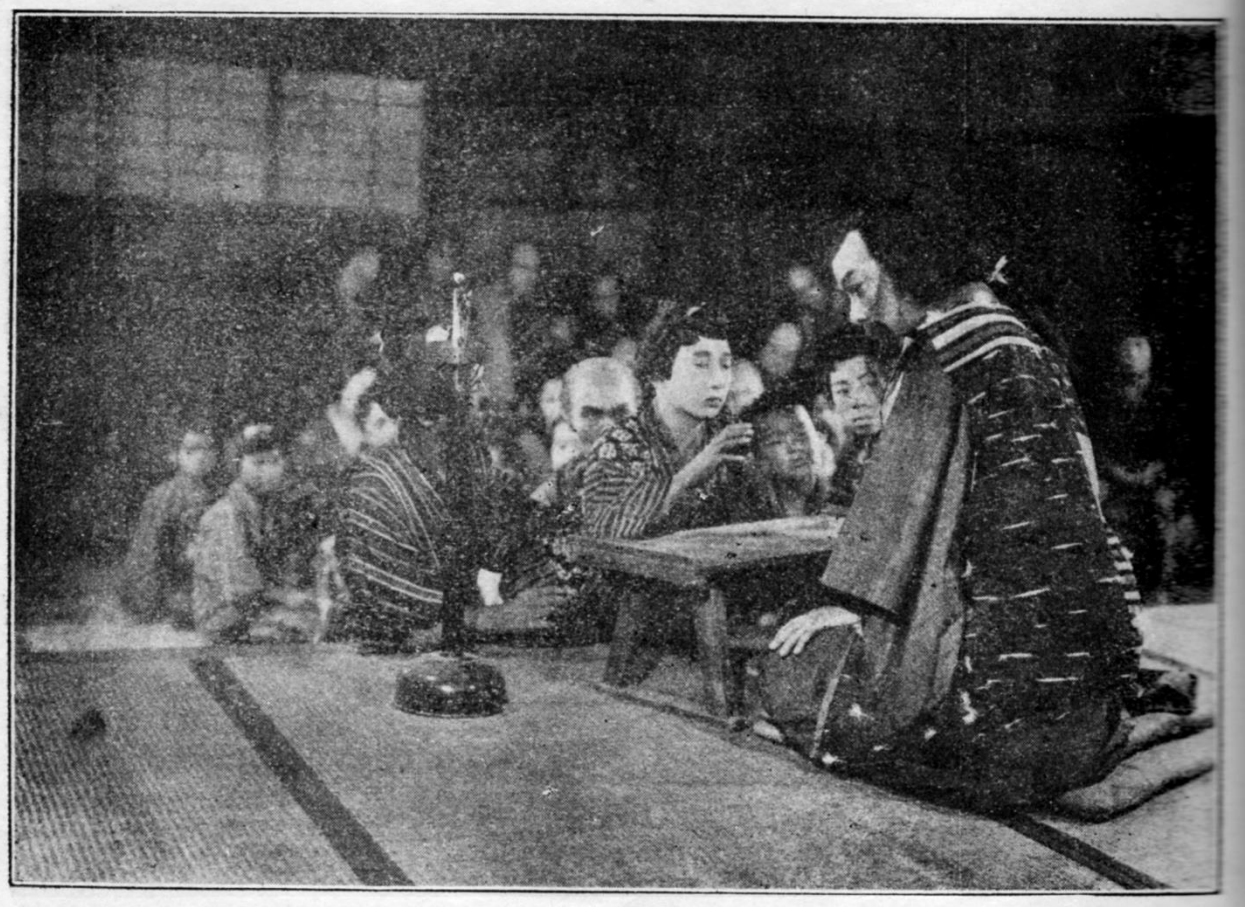
助は何だか變なのでフト口をつぐんで、樣子をうかゞひました。「心配おしでない、止めないで、その先をおきかせ」お母さんは、病の苦しみをおしこらへてうながしました。辰之助はまた、そのつゞきをはじめましたが、だん〳〵不安になつて「お母さん」とよんでみました。「あゝツく、くるしい」お母さんは、たうとう我慢ができなくて思はず、呻きました。「あ、お母さんは、私が勉强のおさらひをしてゐたので、今迄苦しいのを我慢してゐたのですね」「辰之助、これがお別れです……。人は一代名は末代といふことを忘れずに……お母さんにとつては、お前のその勉强の聲が、どんな尊い坊さんのお經よりも、うれしい……」「お母さん、しつかりしてください」「どうか、その心がけをわす



れずに偉い人になつて、お、く、れ、よ」さういつたかと思ふと、お母さんはこう〳〵崩れるやうに、なくなつてしまひました。「あゝ、私はひとりぼつちになつてしまつた」辰之助は、氣を失つたやうに、冷くなつたお母さんの亡骸に、とりすがつてゐました。外では、虫の聲がかなしげに、泣きつゞけてゐました。

四

空のよく晴れた日でした。この村には、珍らしい軍談師が來たといふので、子供たちばかりでなく、大人までが村の道をかけだして行くのでした。けれども辰之助には、それをきゝにゆく元氣もなく、裏の小川で、じつと物思にふけつてゐました。水車は同じやうに



まはつてゐます。さあさあと水のこぼれる音をきいてゐると、亡くなつたお母さんが、椽側で糸車をまはしてゐた姿を思ひだします。同じやうに水は流れてゐる同じやうに水車はまはつてゐる。それだのにお母さんだけが亡くなつてしまつた。辰之助は、泣くまいとしても、涙がこみあげてきます。「また、ぼんやりしてゐるね」と長吉が、うしろにたつて聲をかけました、辰之助はあはてゝ涙をかくして「長吉さんかい」「ウン、おや泣いてゐたね。もう泣かないで行かうよ。面白いお話があるさうだから」長吉は、なぐさめるやうにいふのでした。「あゝいこう」辰之助は、しよんぼりとたちあがりました。あまり行きたくはなかつたのですが、切角長吉がすゝめてくれるものですから。でも暫くして「辰之

助は、きてよかつたとおもひました。軍談師は「楠公父子」の話をしてゐました。あの櫻井驛で正行と別れをおしむ正成の話、今度こそは討死の覺悟をきわめて、「父亡きあとは父に代つて賊を討つてくれよ」といふところでした。その言葉は遂々正行にとつて遺言となつてしまひました。正成の首が、まもなく正行の許へとゞけられた時、正行の小さき胸は、逆賊への怒よりも、まづ父の死んだかなしみで、いつぱいになつてしまひました。正行は、父から賜つた小刀をとりだして、父のあとを追はうとしました。「おまちなさい」母上の嚴しい聲がしました。「父亡き後、今一度、戰をおこし、朝敵をほろぼして、再び君が代に返せとの遺言をわすれたのですか」「わすれはいたしませぬが、父上の首を見ま

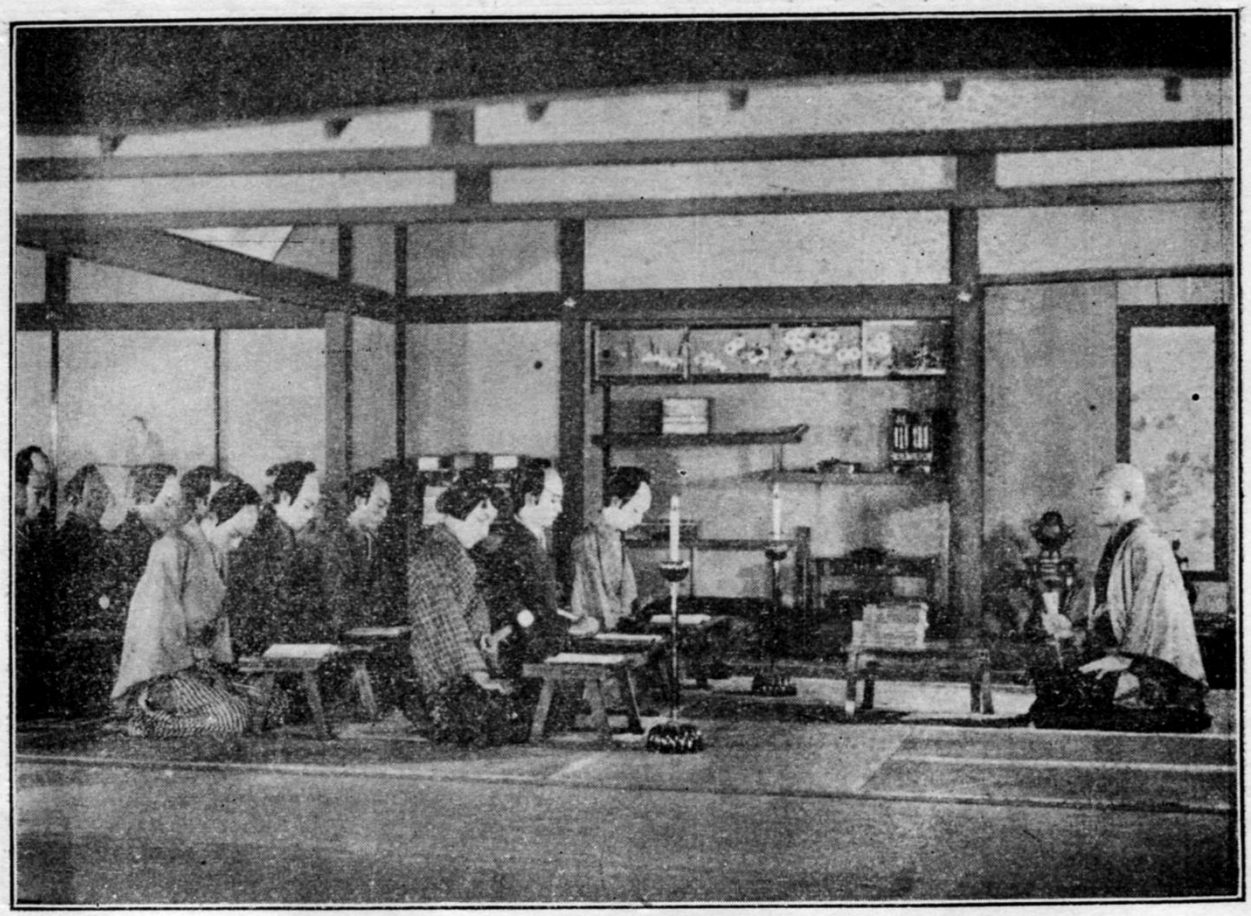
したので急に悲しくなりまして――」「今はかなしんでゐる時ではありません」正行の母はきつぱりとしていふのでした。「今は、かなしんでゐる時ではありません」その言葉が、辰之助の心に強くつよくひゞきわたりました。「お母さんは、私が立派な學者になるようにといつて亡くなられた、私もさう思つてゐた、それだのに毎日女々しくお母さんのなくなつたのを悲しんでゐるなんて、申わけがない」辰之助は正行の雄々しい決心に對しても、ふるひたゝなくてはならないと心にちかひをたてました。軍談師が一席をはつてから、辰之助は、ツカ〳〵とその側へいつて、「いまのお話は、おもしろうございました。私も、よみたいのですが、そのお話は何といふ本にあるのですか」「太平記といふ本ぢや

よ、花のお江戸では、太平記を暗記して、隨分評判の高い人が多いとのことぢや、だが、讀みたいと云つて、お前は目が見にぬのではないかの」「はい、でも一度よんで頂けば、すぐ暗記することが出來ますから」「はゝゝ」と軍談師はふきだしながらいふのでした「しかし、太平記四十卷もあるのぢやぞ、それを全部覺にることは、難かしいぞ、目明きの大人でさへ仲々覺えられんのぢやからな、はゝゝ」と軍談師は、さもおかしさうにお腹をかゝにて笑ひくづれました。

五

辰之助は、軍談師に江戸へ連れて行つてくれとたのんだのですが「盲目ぢや駄目だよ」といつて、頭から。うけつけてくれません。

江戸へ行くらしい飛脚さんにも頼みました。繭を買つてかへる商人にも頼みました、武家らしい人の袂にもすがりました。けれども、誰一人として、辰之助の願をきいてくれる人はありませんでした。「江戸へさへ連れて行つてくれさへすれば、どうにでも學問をするものを」辰之助は、逢ふ人毎が「盲目ぢや仕やうがない」といつて、かまつてくれないので、また自分の盲目が情くなつてきました。「いつそのこと諦めてしまはうかしらん」辰之助は、さびしくさう思ひました。さういふ時に浮ぶのはお母さんの教へでした。岩に矢をとほした人の話でした。「あゝこれほどまでにしても、まだ念力が足りないと見にる」辰之助は深いためいきをつかずにはをられませんでした。と、その晩のことです、不意に表



の戸を叩く者がありました。「もし、もし」辰之助は氣味わるさうに立ちあがりました。「どなたです」「私ですよ、晝間の絹商人ですよ」その人も、辰之助の願をふりすてゝ行つたうちの一人なのでした。「何のごようですか」「ちよつとあけて下さい、辰之助さんこやら、一緒に江戸へまゐりませう、實は途中まで行く道で、あなたが可愛さうになつて引かへして來ました、あたしも江戸へ行つて武家になる決心をしたんです、だから一緒に江戸へまいりましよう」「ぢや、ほんとにお連れ下さるんですか」辰之助は、ころぶやうに走つていつて戸をあけました。「ほんとですこも」「本當ですか」「ほんとです」辰之助は、武家になりたいといふ絹商人の手を、ひしとにぎりしめて、ふるへながら拜みまし

た。「あ、ありがたうございます。この御恩は一生わすれません。翌日、二人は甲斐々々しい身仕度で、武州保木野村をたつて、江戸へこころざしてゆきました。「ぢやあ、辰之助さん、身体を大切になあ」見送りの村の人にまじつて、涙聲でいふ長吉の言葉を、うしろに――。

六

それから、何十年かのちのお話です。「私學講談所」といふ學校で、大勢の弟子たちに教へてゐる盲目の學者がありました。塙保己一です。床の間の前には紋服美々しい町奉行根岸肥前守が座つてゐます。その肥前守が思ひだしたやうにいふのでした。「保己一ごのこうしてそばで、お主を見てゐると、やつば

り、どこかに昔の辰之助の面影がのこつてゐるのう」「それはさうであらうな。だが、あの時の絹商人が、お主だとは誰も考へられんお互に岩に矢をつきさしたといふものであらうか」さういつて保己一は明るくわらつたあとで「まだ昔話がある。ゆつくりして行つて下され、私は教へかけた講義をおへてしまふから」と弟子の方を向きました。「あ、先生、まつて下さい」と弟子の一人が突然いひました。「今、風で灯がきえて字が見えませんから」「はてさて、目明は不自由だのう」保己一は、心からさう云ふのでした「はゝゝゝ」昔。絹商人だつた根岸肥前守は思はず手をうつて笑ひこぼれました。（完）

兒童藝術映畫協會役員

顧問

長岡隆一郎

大野綠一郎

武部欽一

富田愛次郎

賛助員

安武直夫